

秀賞

未来の自分に送るエール

宮城県仙台市立八木山中学校

2年 棟方 有紀

今度こそ。「行けーっ。」毎日同じ場所から投げ込む鉄球。真夏の陸上の練習は全身が汗だくになり、疲労感がたまっていく。気持ちは後ろ向きになって「もう、辞めちゃいたい。」と何度も考える。

先生の言葉を信じていいのだろうか？ 本当に私にできるのかな？

毎日の半端ないハードな練習メニューに息が上がる。他の部員たちは持ち前の軽快さで練習メニューを難なくこなしていく。

「大丈夫かな、わたし……。」それでも日が経つごとに私はようやくみんなとの練習についていくことができた。

そんなある日のこと、顧問の三浦先生から「棟方、砲丸投げをやってみないか。」と提案された。私は思わず尻込みする。いやだった。女子の砲丸投げなんてかっこ悪い。それに、同学年の男子生徒からのからかいも予想されたし、力持ちの女子なんてみっともなく感じていた。私が返事に困っていると、先生は続けてこうおっしゃった。「棟方には砲丸の素質があるんだ。それに砲丸投げに必要なのは力だけじゃない。」

その時、「ドスンッ。」大きな音が校庭中に響き渡る。急いで目を向けると、その先では3年生男子の先輩が5kgの鉄の砲丸を一人で投げて練習していた。先輩は県大会にも出場し、各大会で入賞している選手だった。黙々と練習をこなす先輩の姿に私は素直に感動し、目を奪われた。

「カッコイイなあ、先生、私も砲丸投げをやってみたいと思います。」先輩から繰り出された一投で、私は決断した。

翌日からの私の練習には砲丸投げも加わった。中学生女子の砲丸の重さは2.7kg。まずは夏休み明けから始まる仙台市の新人戦に向けての練習が開始された。

3年生の先輩方は残念なことにこの頃、引退の時期に差ししかかっていたが、先生の熱意もあって、憧れの先輩が直々に砲丸投げを私に教えてくださった。

市の新人戦では、基本的な投げ方である立ち投げで挑んだ。他校の選手たちはより高度なグライド投げで参加している。しかし、私に焦りはなかった。ピッチに立って本番前の練習が始まると、他校のライバルたちは内心、私の立ち投げスタイルを小ばかにしているようであった。

次は私の出番、そして先生からの一言。「一発、見せつけてこい。」私は元気

よく「はい、行ってきます。」と笑顔で答えた。

私は記録 7 m 超で、女子砲丸投げで 7 位に入賞した。それから、秋には宮城県の砲丸投げの強化選手に推薦され、他校の選手たちと土日の特別練習に参加した。強化練習では立ち投げのスタイルから、徹底したグライド投げの練習が始まり、ぐんぐんと自己ベストを更新し、大会記録も 9 m 70cm まで伸ばすことができた。

しかし、10m の壁は厚い。練習では記録が達成できそうなコンディションでも大会で出なければ意味がない。私は次第に焦りと苛立ちでくじけそうになっていった。「君のグライド投げのスタイルは綺麗だ、あとは体重移動だけマスターすればもう 3 m は飛距離を伸ばせる。12m は出せる。」顧問の先生はじめ、強化選手コーチの諸先生方も太鼓判を押してくれた。でも、自分では信じられない。肩が限界で、何度投げてでも 10m には届かなかった。「辞めてしまいたい…逃げたい。」心の中で何度も何度も考える。練習もだんだんつらくなっていく。

陸上は、自分との闘いだ。夏の日差しは暑すぎて頭がクラクラする。何かを考えることすら面倒くさい。2.7kg の鉄球が重くてたまらない。

その時、「棟方、自分で自分の限界を決めるな！ 大丈夫、自分の可能性を信じろ！」

先生からのこの一言が私の心に刺さった。とたんに自分の中の導火線に火が付いた。

「もういっちょ一けーっ。」もっと高く、もっと遠くへ。私の手から離れた鉄球は、いつもよりも回転速度を上げて太陽に向かって飛んでいく。大丈夫だ、今の私に足りないものは分かっている、いつだって自分を信じて前進しよう。

「ドスンッ。」

マンツーマンで練習に付き添ってくださった先生からの大きな拍手が校庭に響いた。爽やかな向かい風がやさしく私の顔をなで、大いなる達成感につつまれる。

この時、私はこの先の未来の自分に向かってエールを送る。

「大丈夫、あと 3 m は夢じゃない！」